短歌ごっこ'10.長月

逸見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
短歌ごっこ-１０．長月

【Ｎコード】
Ｎ０８２６Ｏ

【作者名】
逸見

【あらすじ】
日常を詠んでます

短歌の形式だけど、「短歌」と言い切ってしまうのは、なんかおこがましい

そんな訳で「短歌ごっこ」です

本当に
言いたいことは
言い出せず
いくつも言葉
宙に漂う

あるはずの
平常心が
脆いこと
気付いた夜に
見る曇り空

バナナでも
腐る間際が
おいしいと
力説しながら
例えがカナシい

現実と
いう真実に
感情は
色を付け足し
我を惑わす

朝からの
雨すぐに止み
いつの間に
見慣れた青空
大きく広がる

時間だけ
ただ淡々と
過ぎ行くを
ただ見てるだけ
寝付けぬ暑い夜

知らなくて
済むことならば
知らぬまま
過ぎるを希望
…しつつ知りたい

枝葉たち
大きく揺らし
吹く風と
ツクツクボーシの
鳴き声の午後

矢印の

向きそれぞれに
違うとこ
指せばいいのに
クロスして

ゆらゆらと
ふらふらの間
行き来する
どちらにしても
揺れてるのだなぁ

今度こそ
髪をバッサリ
切るのだと
誰言うことなく
決意する夏

エアコンが
好きや嫌いと
言うレベル
超えているでしょ
今年の暑さ

長いよな
短いような
感覚の

三十一文字の
言葉の世界

願うこと
止めなければ
いつの日か
叶うと知った
暑い夏の日

灯りつつ
大きく小さく
揺れながら
蝋燭は燃ゆ
燃え尽きるまで

方丈記
名文の出だし
なるほどと
思うは四十路
越えたあとから

行く程に
ゴールが遠く
なるような
錯覚さえする
長き道のり

紛れこみ
返しそびれた
メールあり
日に日に親指
重くなりゆき

重ね行く
季節に逆を
行きたがる
先は何にも
見えて来ずとも

気まぐれに
見上げた空に
うろこ雲
やっと残暑と
呼べる長月

命尽く
期限知りつつ
鳴いてるか
競うがごとく
ツクツクボーシ

五里霧中
暗中模索
日々精進
一喜一憂
一意奮闘

何もない
それが氣には
ならぬほど
強気になれる
年ではなくて

雲流れ
見え隠れする
月　まるで
早送りして
いるかの速さで

日毎増え
賑やかに鳴く
虫の音を
聞きつつなめる
のど飴一つ

うっすらと
紅をさしたる

夕暮れの
一歩手前の
一瞬の空

ひまわりや
朝顔な人
入りみだれ
人それぞれに
咲く花畑

永遠に
続くような
氣さえした
暑さ立ち去り
長袖の朝

どこかしら
笑顔にも似て
満月は
九月の空で
ただ光り行く

無常では
ない現実の
無情さを
嘆くでもなし

笑うでもなし

貯めたいと
思うものは
一向に
貯まらず溜まる
ゴミだけ何故か

目に見えぬ
それぞれ違う
境界線
引いては分ける
物や人さえ

少しだけ
物悲しさを
感じるは
彼岸を過ぎて
聞く蝉の声

言葉など
出ては来ずに
笑顔だけ
思い浮かべて
手を合わす午後

いつまでも
あなたの前では
子供です
照れず言いたい
ありがとうって

少しずつ
明け行く外の
濃淡は
見飽きぬ大きな
ショーにも似たり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0826o/

短歌ごっこ'10.長月

2010年10月15日04時04分発行